

## 天狗の話

——『天狗の内裏』における六道案内

ケラー キンブロー

室町物語のさまざまな作品の中では、超自然的で有り得ないような旅が普通である。例えば、『倭藤太物語』で倭藤太秀郷が竜宮へ旅することや、『御曹子島渡』で源義経が馬人島むまびとじまや裸島はだかじまへ旅することがあるように、お伽草子の旅行譚は、よく現世の境界を超越したり、超人的空間を探検したりすることを主なテーマとして取り上げる。この想像性豊かな旅話の中には、六道（地獄道、畜生道、餓鬼道の三悪道を含む）を訪れる人々についてのストーリーがいくつかある。概して、この種の話には六道でのひどい罰について生々しい説明が詳細に記述されているのみならず、どうしたら読者や聴衆が六道行きを避けられるかという各宗派観的な忠告が多く載っている。

お伽草子における地獄・六道巡り物語を多少列挙すると、次のようになる。インドの僧侶、目連が母を地獄で見つける『目連の草紙』、8世紀の聖武天皇の后が死後に閻魔王の宮廷を訪ね、再び現世に蘇る『大仏の御縁起』、仁田四郎忠綱が1201年に六道を旅する『富士の人穴草子』、比丘尼慶心が1439年に閻魔王宮を旅した自叙伝的作品とされる『長宝寺よみがへりの草紙』、13歳の源義経が父に会うため1172年頃に三悪道を巡り極楽浄土まで行く『天狗の内裏』等だ。現存する数多くの絵巻や版本から判断すると、近世に最も人気を博した六道物語は、『天狗の内裏』だと言えるかもしれない。その理由は明らかではないが、本稿では『天狗の内裏』の特別な深みを指摘したいと思う。他のお伽草子と違い、『天狗の内裏』が描く六道巡りは実際の旅であると同時に、その旅を比喩的な心の道行にしている。つまり、出家すべきか、それとも平家と戦うべきか、と悩む義経の抽象的な決断の過程をその旅に映し出して示す。

『天狗の内裏』は、16世紀初め頃の作と思われる。発生のことはあまり知られていないが、一番古い形態を遺す諸本の言葉遣いから、学者はこの物語が元々は説経として語られていたと見ている<sup>1</sup>。1928年に島津久基は、『天狗の内裏』がヴァザル

<sup>1</sup> 室木弥太郎『増訂語り物（舞・説経・古浄瑠璃）の研究』風間書房、1992年、31、41-42頁；徳田和夫『お伽草子研究』三弥井書店、1998年、288頁。古い形態を遺すテキストは慶応大学図書館本（1504-1528頃）、守屋孝蔵旧蔵の奈良絵本二巻本（1688-1704頃）、赤木文庫旧蔵の寛永11年写本を含む。大英図書館蔵『天狗の内裏』奈良絵本絵巻は室町後期の書写

の『イニード』第6巻、イニースが地獄極楽巡りをして亡き父アンカイシーズと会い、未来を預言される作品の翻案だと述べた<sup>2</sup>。しかし、彼の推論は証拠に乏しく、両作品の筋や組立てが似通っていても、『イニード』の影響問題は未解決のまま。

『天狗の内裏』の冒頭で、義経は毘沙門天の再誕だと説明される。父の義朝は1159年の平治の乱を起こした人物の一人であり、その結果、義経が幼児のときに命を落としている。『天狗の内裏』で、義経は7歳から都の北山にある鞍馬寺に住み始める。義経が鞍馬寺本尊である毘沙門天に祈ると、毘沙門天は人間には見つけられない天狗の内裏への行き方を教える。中に入ると、義経は大天狗の妻から、父は九品の浄土に大日如来として生まれ変わったと聞かされる。大天狗は義経を父のところに連れて行くことを承知するが、その前に何らかの理由で、136の地獄をはじめとして、六道から見せることにする。

『富士の人穴草子』でも、忠綱がよく似た六道・浄土巡りをするが、この場合は浅間大菩薩が案内する。また、『長宝寺よみがへりの草紙』の慶心も同様に地獄巡りをするが、慶心の場合、まず不動明王、そして閻魔王が導く。これらと比較すると、義経の案内者が天狗であることは非常に興味深いと思う。菩薩や明王と違い、天狗は中世文学では人を助けたり案内したりするよりも、惑わすことが多い故に、義経のガイドを天狗にしたことには意味がありそうだ。旅全体に疑いを投げかけ、読者に本当は何が起こっているのかという疑惑を植え付け、すでに超現実的な物語に一層の不可思議さを加える。義経の旅に疑いを持たせることにより、他の解釈、つまり比喩的な見解を可能にさせる。

天狗は、仏教を深く理解しながらも、敵意を持っていることがよく知られている。『今昔物語集』(20:1)では、海の向こうから法文を唱えるのを聞いたインドの天狗がその尊さに苛立ち、日本の比叡山まで止めに飛んだと言われる。しかし、天狗は本意を遂げずにかえって発心してしまった。『今昔物語集』の他の説話(20:2)によると、中国の高僧をすべて負かした智羅永寿ちらやうじゆという中国天狗が、日本の僧侶と力比べをしに日本へ来るが、やはり、腰を踏み折られて負けてしまう。この説話は14世紀初めの『是害房絵』絵巻になったようで、中国の天狗「是害房」が日本仏教を邪魔するため、966年に来日したと書かれている。比叡山の天台宗の僧正に負け続けた後、是害房は二度と日本には戻らないと誓いながら中国に帰る。これらの、また他の天狗物語に基づき、小峯和明は天狗が仏法勢力に反逆を企てても、結局いつも撃退される故、一見天狗の反乱的な物語は仏法の威力を害するというよりも、実は確証する役割を帯びると述べている<sup>3</sup>。

中世文学では、天狗が仏教に対して強い反感を持っているため、僧侶をよく攻撃する。『天狗の内裏』の考察にも特に意味があると思うが、天狗が好む作戦の一つ

だが、多少新しい版本系統になる。

<sup>2</sup> 島津久基編『近古小説新纂』有精堂、1983年再版、609-615頁。

<sup>3</sup> 小峯和明『説話の森 天狗・盗賊・異形の道化』大修館書店、1991年、36頁。

は別世界を見せ、僧や比丘尼を惑わせることである。謡曲『大会』<sup>だいゑ</sup>、また、13世紀の『十訓抄』の関連説話(1:7)を例にとると、天狗が比叡山の僧に、釈迦牟尼が靈鷲山<sup>りょうじゆせん</sup>で説法を行う場面の幻覚を見せる。同様に、お伽草子『車僧草子』<sup>くるまやうそうし</sup>では愛宕山の太郎坊が「車僧」という禅僧にまず阿修羅道を見せ、次に極楽浄土を含む珍しい場所を数々見せてやると言い、魔道へ引き入れようとする。車僧は幻想に驚嘆させられるが、すぐに気を取り直し、「悪魔降伏の呪」<sup>あくまかうふくじゆ</sup>を用いて天狗のいたずらを止めさせる<sup>4</sup>。

『天狗の内裏』で義経は、禅宗の参学を極めた賢い稚児だと紹介される。自然に天狗の的にされるだろうと思うかもしれないが、この話ではそういうことがないように見える。中世文学には思いやりのある天狗は少ないのだが、鞍馬山の大天狗がその一人であり、初めて義経に会ったときから敬意を持って親切に振る舞い、黄金を献上し、義経を山海の珍物や酒、神通芸でもてなす。かえって、義経こそが接待役の天狗を騙すわけで、二度、嘘をつく。一回目は天狗の内裏に着いたとき、内裏を探していたと言わずに御供えの花を探していたと言い、二回目は父のところへ連れて行ってくれるよう大天狗に頼む際、大天狗が136地獄、または浄土にも飛ぶことを大天狗の北の方からではなく、人間界で聞いたと言う。

しかし、大天狗が義経をそのあり得ない旅に連れて行くときに、大天狗はやはり天狗だということだけで、読者には解明できない疑惑が続く。義経の、かつ読者の人間界を超えた空間での体験は他の六道巡り物語とは違い、義経の、武士になるべきか、それとも僧になるべきかという心理的葛藤の影響をどうも強く受けているようだ。義経の優柔不断は、孝行息子としての両立できない義務、すなわち父の仇討ちをするか、来世の供養をするか、という悩みから生じている。

義経の矛盾はまず餓鬼道で現れる。そこで、7代後の子孫が出家したと笑い踊る餓鬼に出会うが、その餓鬼は子孫のおかげでやっと成仏できると喜んでいる。すると、近頃武士の道に心が傾いていた義経に、自己疑問や自責の念が急に湧きあがる。大英図書館蔵絵巻では、義経は涙を流しながら次のように考える。

我ものゝふの心ざしなりしかど、かやうの事を思へば、とやせんかくやあらんと思ひわきまふかたぞなし。保元、平治の乱に一門皆うたれぬれば、菩提をとぶらふためならば、出家もめでたかるべし。又親の仇を討ち、本意をとげんためならば、弓矢をとりて孝養にほうぜん。<sup>5</sup>

次に大天狗は義経を阿修羅道に導く。偉大な神のような阿修羅が残酷な血みどろの戦いをする場所だが、義経がまず見るのは切腹である。大英図書館本から引用す

<sup>4</sup> 横山重・松本隆信編『室町時代物語大成 第4』角川書店、1976年、280頁。

<sup>5</sup> 辻英子『在外日本絵巻の研究と資料』笠間書院、1999年、362頁。読解の便宜上、句読点や濁点等を補い、漢字を当てた。



【図】阿修羅道を訪れる義経と大天狗。『天狗の内裏』絵巻断簡、寛文頃か。架蔵。

ると、「娑婆にて父を人に討たせ、其かたきを討たずして死したるものと見えつるが、我とわが身を切つつ、突いつ、ひとかたならぬ苦患なり」という<sup>6</sup>。切腹の場面は中世・近世初期の阿修羅絵によく見られるが、父の敵を討たなかった人の罰だという義経の受け止め方はかなり変っている。『富士の人穴草子』の浅間大菩薩によれば、阿修羅道はただ戦死した人の場所、あるいは『長宝寺よみがへりの草紙』で慶心が殺された稚児に教えてもらうように、暴行を受けて死んだ人の場所として知られている<sup>7</sup>。そう考えると、義経の異常な見解は、矛盾した心理から生まれたとしか説明できない。

旅の最終地として大天狗は、義経を西方浄土に連れて行く。より古い形態を遺す『天狗の内裏』諸本の浄土描写は、近ごろ大日如来になった頼朝が築いた要塞のことに限られている。例えば、16世紀初め頃の慶応大学図書館蔵写本では次のようになる。

九品の浄土に、お着きある。さて、此九品の浄土にこそ、御曹司の父、義朝様は、大日如来に、ならせたまいて、中尊に、立、せたまへば、四方の御門に、

<sup>6</sup> 辻英子『在外日本絵巻の研究と資料』、363頁。

<sup>7</sup> 横山重・松本隆信編『室町時代物語大成 第11』角川書店、1983年、446頁（『富士の人穴草子』）、大島建彦・渡浩一編『室町物語草子集』新編日本古典文学全集63、小学館、2002年、441-442頁（『長宝寺よみがへりの草紙』）。

番衆きびしく見へたりける。まづ、東の門の御番衆には、勢至菩薩の御番なり、南の門には、普賢の御番なり。なかにも天狗は、「北の門より、いれ申さん」とて、北の御門に、参りつゝ、門の扉を、おしならし、「こゝしばし、あけてたべ」と、申された。弥勒菩薩は、きこしめし、「誰や、たぞ」、お咎めある、大天狗は、聞くよりも、「いや、苦しうもさふらはんず、娑婆よりも、天狗仏が、参りてさふらふ、こゝしばし、開けてたべや」と申した。弥勒菩薩は、聞こしめし、「さらば」とて、出させたまいて、門の、くわんの木、ひらかせたまふが、その音が唐土、天竺、我朝、三国に広まって、十二のかくと、をとづる。<sup>8</sup>

義朝が浄土を軍事化したことでいくつかの面白い疑問が湧き上がってくる。義朝は平の死者の侵入を恐れていたのだろうか。また、もし平の兵士が往生したとして、大日如来になった生前の敵の大將が浄土を統治していると知ったなら、どう思うだろう。例えば、平維盛は『平家物語』（巻第十）の中で、念仏を百回唱えて入水したと伝えられているが、浄土の門で義朝・大日の門番を見たら、驚くだろう。さらにもっと不思議なことだが、義朝・大日が阿弥陀の西方浄土でも阿弥陀に取って代わったようだ。義朝と大天狗は義経に念仏を唱えるよう勧めるが、古い形態を遺した『天狗の内裏』の浄土の場面では、阿弥陀の名前さえ出てこない。

義経が体験する浄土と、『富士の人穴草子』の忠綱や他の六道旅行者が体験する浄土との違いは、父への妄念が義経に深い影響を与えていることから生じたのだろう。菩提を得たと言っても、義朝・大日は息子を見ると涙を流し、平が減びないことには怒りがおさまらないと打ち明ける。出家や仏道修行をするよりも、平を討つよう命令する。「千部万部の経もいらす。仇を討ちてたび給へ」と言う<sup>9</sup>。これにより、義経の悩みは簡単に解決され、娑婆に帰ったら何をすべきかが、大天狗のおかげではっきりとわかる。六道巡り物語に影響を与えたと思われる『華嚴経』の善財童子のように、義経も出発点（鞍馬寺）に戻るが、有名な童子と違い、菩提を得るどころか、仏道を捨てることにする。

それでは、読者は義経の浄土体験をどう考えればいいのか。確かに、義経は大天狗に騙された可能性もある。『車僧草子』と謡曲『大会』の反仏教天狗のように、大天狗が義経に幻覚を見せたかもしれない。しかし、そんなことはなさそうだ。関連作品の舞曲『未来記』と違い、『天狗の内裏』には義経の旅が本当ではないとか、大天狗が義経を裏切っていることを示唆するような文面は見当たらない<sup>10</sup>。にもかかわらず、義経の旅が、父の敵討を決心する心理的なプロセスに見えるのも

<sup>8</sup> 横山重・松本隆信編『室町時代物語大成 第9』角川書店、1981年、565-566頁。句読点、濁点、漢字表記については、守屋孝蔵旧蔵本（『室町時代物語集2』、385頁）を参照した。

<sup>9</sup> 辻英子『在外日本絵巻の研究と資料』、367頁（大英図書館本）。

<sup>10</sup> 『未来記』の終わりに、義経が「扱は、天狗が牛若を扱へけるよ」（自分が天狗に騙された）と判断する。麻原美子・北原保雄編『舞の本』新日本古典文学大系59、岩波書店、1994年、311頁。

偶然ではないと思う。さらに、大天狗は、義経の出家の望みを最終的に思い止まらせる。説話やお伽草子の是害房・太郎坊等の天狗はたいてい失敗するが、この大天狗は仏教を邪魔することに本当に成功する。このように、『天狗の内裏』を判官物ではなく、天狗の話と考えると、仏法の威力を確証するストーリーというよりも、仏法を排除したすばらしい天狗物語ということになる。

さて、『天狗の内裏』の六道巡りは実際にあったのだろうか。それとも、なかったのだろうか。中世天台の注釈書等では、『華嚴経』の「己心の弥陀」や「唯心の浄土」という観念（つまり、阿弥陀も浄土も人の心にあるということ）が、肯定されると同時に否定されている。天台の不二思想に従えば、浄土は宇宙のかなたの西方にもあり、この世にもある。阿弥陀は極楽浄土に存在しながら、信者の心と一体的なものだ。『天狗の内裏』は天台宗の視点から書かれたようではないにしても、義経の六道巡りをこのように不二的に理解したくなる。つまるところ、この六道巡りは実際の旅だといっても、心に外ならない旅だとも言えるのではないだろうか。

翻訳：キンブロー衣い子